

資金循環統計の改定値の公表について

1. はじめに

資金循環統計については、新たに入手した基礎資料や制度変更を反映するため、毎年3月に遡及改定値を公表しています。

本年は、基礎資料である国際収支統計が新しい基準(国際収支マニュアル第6版、以下BPM6)に準拠した新統計を公表し、合わせて新統計と連続性のある過去の時系列計数(以下、6版組み替え計数¹)を公表したことに伴い、6月にも遡及改定を実施することとし、1998年4～6月期以降の四半期計数、ならびに1998年度以降の年度計数の遡及改定を行いましたので、お知らせします。遡及改定値については、[時系列統計データ検索サイト](#)をご覧ください。

このほか、今回の遡及改定では、生命保険部門の保険・年金準備金の見直しも併せて実施したほか、3月以降に新たに入手した基礎資料の反映等も行っています。主なポイントは、以下のとおりです。

(1) 6版組み替え計数の反映

- ・ 国際収支統計が公表した6版組み替え計数を反映しました。

(2) 生命保険部門の保険・年金準備金

- ・ 生命保険部門の保険・年金準備金に新たに調整額を計上しました。

2. 個別の主な見直し内容

(1) 6版組み替え計数の反映

国際収支統計は本年3月10日、新しい基準(BPM6)に準拠した新統計を公表し、合わせて新統計と連続性のある過去の時系列計数(6版組み替え計数)を公表しました。6版組み替え計数では、取引額(フロー)を示す国際収支統計のみならず、残高を示す対外資産負債残高統計に関しても過去に遡って改定されました。

これに伴い、①金・SDR等の扱いを変更したことに加え、②直接投資の計上原則等の変更といった見直しを行いました。今回の見直しで2008SNAと整合的なBPM6に準拠した計数(6版組み替え計数)を反映することにより、将来の改定に向けた基礎統計との整合性が高まることとなります。

¹ 6版組み替え計数の詳細については、[6版組み替え計数の公表について](#)をご覧ください。

① 金・SDR等の扱いの変更

(イ) 内容

資金循環統計では、国民経済計算体系の新たな作成基準（2008SNA）を踏まえた見直しを検討しておりますが²、2008SNAでは、「貨幣用金のみが、対応する負債の存在しない資産」と規定が改められました（1993SNAでは、対応する負債の存在しない資産は貨幣用金およびSDRと規定されておりました）。

こうしたもとの、本年3月10日に公表された、国際収支統計の新しい基準（BPM6）に準拠した新統計では、従来は公表されていなかった、外貨準備資産の内訳（貨幣用金、SDR、IMFリザーブポジション）が初めて開示されました。これにより、国内および海外部門の「うち金・SDR等」項目の資産および負債について、貨幣用金を除いたそれ以外（SDRおよびIMFリザーブポジション）の合計値を計上することが可能となりました。

データの遡及期間は、1998年4～6月期以降です。

(ロ) 影響

(海外部門の負債としての「うち金・SDR等」計上開始)

資金循環統計では、これまでも、海外部門の「うち金・SDR等」（負債）という項目は存在しましたが、「金・SDRは、対応する負債が存在しない資産（資産と負債がバランスしない唯一の例外）」との現行作成基準（1993SNA）の規定に則り、計数はゼロでした。

今回の変更により、海外部門の「うち金・SDR等」（負債）に、貨幣用金以外の計数、すなわちSDRとIMFリザーブポジションの残高の合計額を計上することとしました。2013年12月末における計上額は、3.6兆円です。

(海外部門の「金融資産・負債差額」の計算方法変更)

また、上記の変更に伴い、わが国の対外純資産にあたる海外部門の「金融資産・負債差額」（負債）の計算方法が変更となりました。

当該項目は、対外資産負債残高統計における純資産残高から、対応する負債がない資産を控除して作成しています。これまでは、国内の「うち金・SDR等」（資産）の全額（すなわち、貨幣用金およびSDR、IMFリザーブポジションの合計額）を控除していましたが、見直し後は、このうちの「貨幣用金」のみを控除して作成することとなります。

この変更による海外部門の対外純負債額（わが国の対外純資産額）への影響額は、2013年12月末で3.6兆円の増加です。

(国内の負債としてのSDR計上開始)

このほか、国内の負債として、SDR（IMF特別引出権）の計上を開始しました。

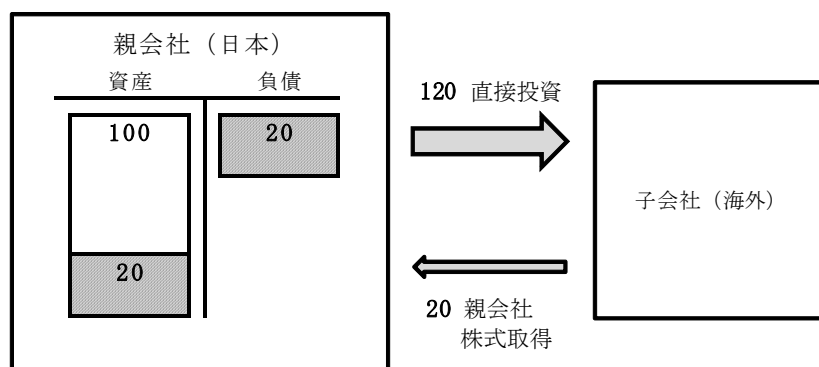
² 2008SNAを踏まえた見直しの詳細については、「[2008SNAを踏まえた資金循環統計の見直しに関する最終案](#)」（2014年6月6日、日本銀行調査統計局）をご覧ください。

SDR は、IMF が加盟国に配分した準備資産であり、資金循環統計ではこれを通貨当局の保有する資産としてのみ計上していました。一方、BPM6 では、SDR を、資産であるとともに、その国が加盟国全体に対して集団的に返済する義務を負う負債とも位置付けました。

今般、6 版組み替え計数において、国内の負債としての SDR 残高（配分・抹消の純累計額）が新たに公表されましたので、資金循環統計でも、これを中央政府部門の負債として計上するとともに、海外部門の資産として計上しました³。2013 年 12 月末における計上額は、2.0 兆円です。

② 直接投資の計上原則等の変更

6 版組み替え計数では、これまでの「親子間原則」、すなわち、子会社から親会社への資金移動は、親会社による投資の回収として親会社の資産から控除する取扱いが撤廃され、「資産・負債原則」、すなわち、上記取引を親会社の正の負債として計上する方法が採用されました。



第 5 版： 資産 100、負債 0 と計上
 第 6 版組み替え計数： 資産 120、負債 20 と計上

これに伴い、資金循環統計における海外部門の「対外直接投資」（負債）と、「株式・出資金」（資産）の計数が改定されました。この変更による 2013 年 12 月末における影響額は、いずれも 0.1 兆円の増加です。

また、6 版組み替え計数における再投資収益の計上時期の変更に伴い、海外部門の「資金過不足」（負債）も改定されました。国際収支統計では、企業の決算データから作成される再投資収益を、これまで本来の収益獲得時期ではなく、データの入手時（17 カ月後）以降に計上していました。6 版組み替え計数において年次改訂制度が導入されたことに伴い、再投資収益が、本来の収益獲得時期に計上されることとなりました。

³ 資金循環統計における中央政府部門の「うち金・SDR 等」（負債）および海外部門の「うち金・SDR 等」（資産）に計上しました。項目名は「うち金・SDR 等」ですが、計上されているのは SDR のみで、貨幣用金の残高はゼロです。

(2) 生命保険部門の保険・年金準備金

(イ) 内容

生命保険会社は、契約者から受け入れた積立金のうち契約者の持分に相当する金額を、将来の支払いに備えて運用しています。資金循環統計では、責任準備金データなどを基礎資料に、これを「保険・年金準備金」として生命保険部門の負債、契約者（家計）の資産に計上しています。

この「保険・年金準備金」の取引額（フロー）は、保険契約の増減、保険料の払い込みおよび保険金支払いによる保険料積立金の増減等を反映するものと考えられます。資産の時価変動や為替評価に伴うキャピタルゲイン・ロスによる変動は、本来は調整額として計上するのが適当です。もっとも、これまで「保険・年金準備金」の取引額は、ストックの前期差として算出していたため、運用実績等を反映した変動も取引額として計上されており、精度向上の余地がありました。

今回の見直しでは、運用実績等を反映した「保険・年金準備金」の変動の一部を、調整額として計上することにしました。具体的には、生命保険部門が運用する特別勘定⁴のうち、個人保険、個人年金保険⁵に係る運用損益を、生命保険協会の公表資料や生命保険各社の財務諸表から推計し、調整額として新たに計上しました。これにより、「保険・年金準備金」の取引額の精度が向上したほか、保有部門である家計部門の資金過不足も、より正確に捉えることができるようになりました。

データの遡及期間は、2009年4～6月期以降です。

(ロ) 影響

上記見直しにより、生命保険部門の保険準備金、年金準備金に新たに調整額が計上されるとともに、取引額が同額の影響を受けました（2012年度の取引額は、保険準備金が0.2兆円減少、年金準備金が2.3兆円減少となります）。

また、家計部門の保険準備金と年金準備金の取引額および調整額にも同額の影響が及びますので、その結果、家計部門の資金過不足は以下のとおりとなります。

⁴ 特別勘定では、契約者が受け取る保険金等が運用実績に応じて変化する契約が運用される勘定で、運用損益は責任準備金残高に反映されます。

⁵ 特別勘定で運用される個人保険、個人年金保険には、個人変額保険、個人変額年金保険等があります。

▽家計部門の資金過不足への影響額（兆円）

年度	2009	2010	2011	2012
見直し前	16.4	17.1	23.9	23.8
見直し後	14.6	17.4	23.5	21.3
差額	▲ 1.7	0.4	▲ 0.4	▲ 2.5
うち保険・年金準備金による影響額	▲ 2.4	0.4	▲ 0.4	▲ 2.5

以 上

本件に関する照会先
 日本銀行調査統計局経済統計課
 金融統計グループ
 03-3279-1111（内線 3951）